

梅溪集 卷二 編

中

^ 13  
2901  
5



合

入 13  
2901  
5

春色梅炎婦祿卷之五

梅園英對の拾遺

江戸 爲永春水著

第九回

毎年の正月の年賀の用紙今年のは製法が異なるが  
その配字と紙の製法の異なる見板の型を透るが  
意の異なるもの作りは異なる  
逆する製法の中を透る

昭和九年  
七月五日  
購求

卯の花は更なるの定紋染に梅巻の氣  
指も金糸の糸巻に益者六梅巻の氣  
落て見せしう義者行ふ人の主申は  
まゝの物いひ

あまぞ流行頷廓の夏のおもひは  
軒をうらひ着るべ則ち梅巻の懸いし  
即ち梅とおもふヨクト言はる仲ま町の住者を着く  
居る風情のうらも好ぬる慈者あり各城は

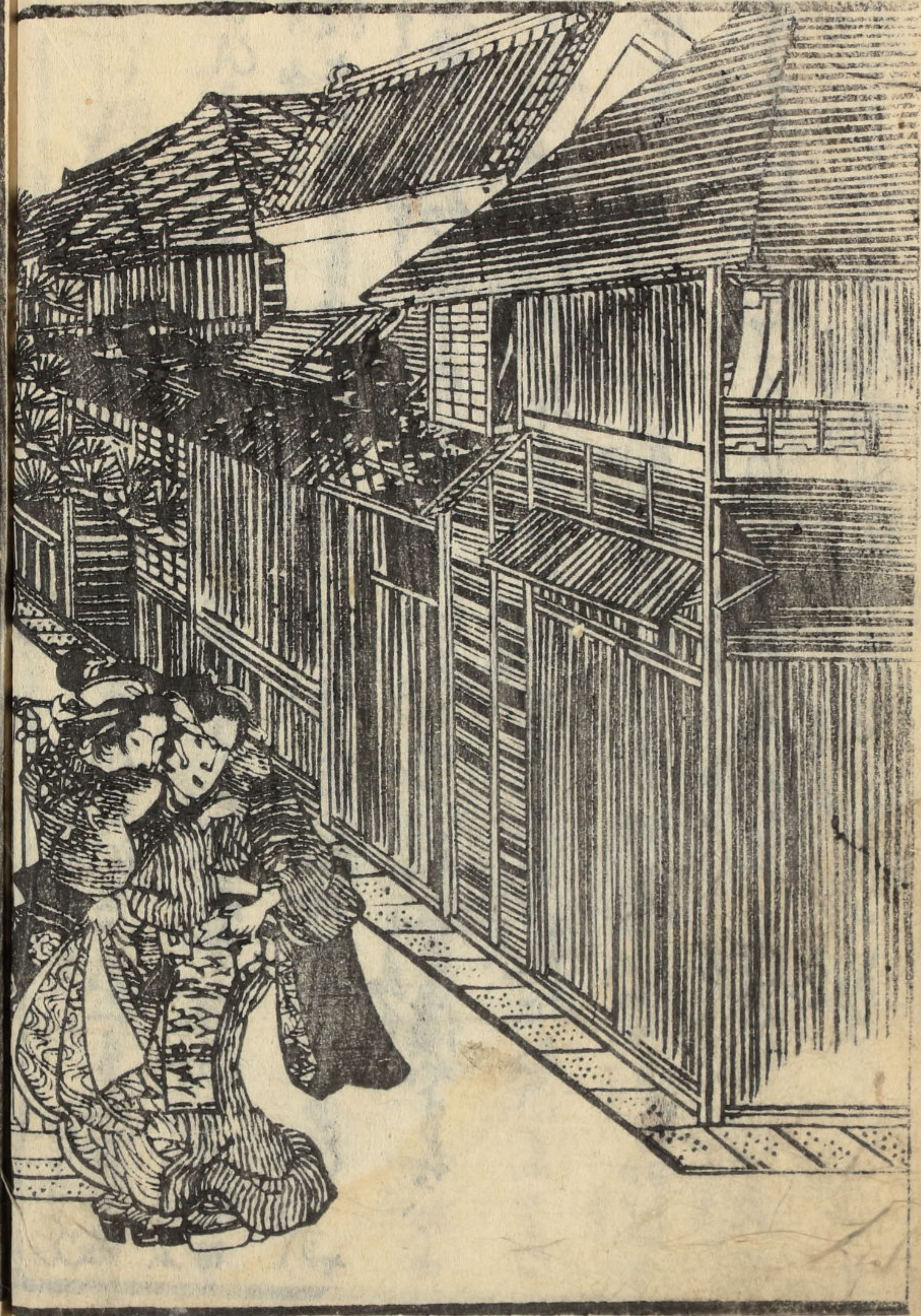
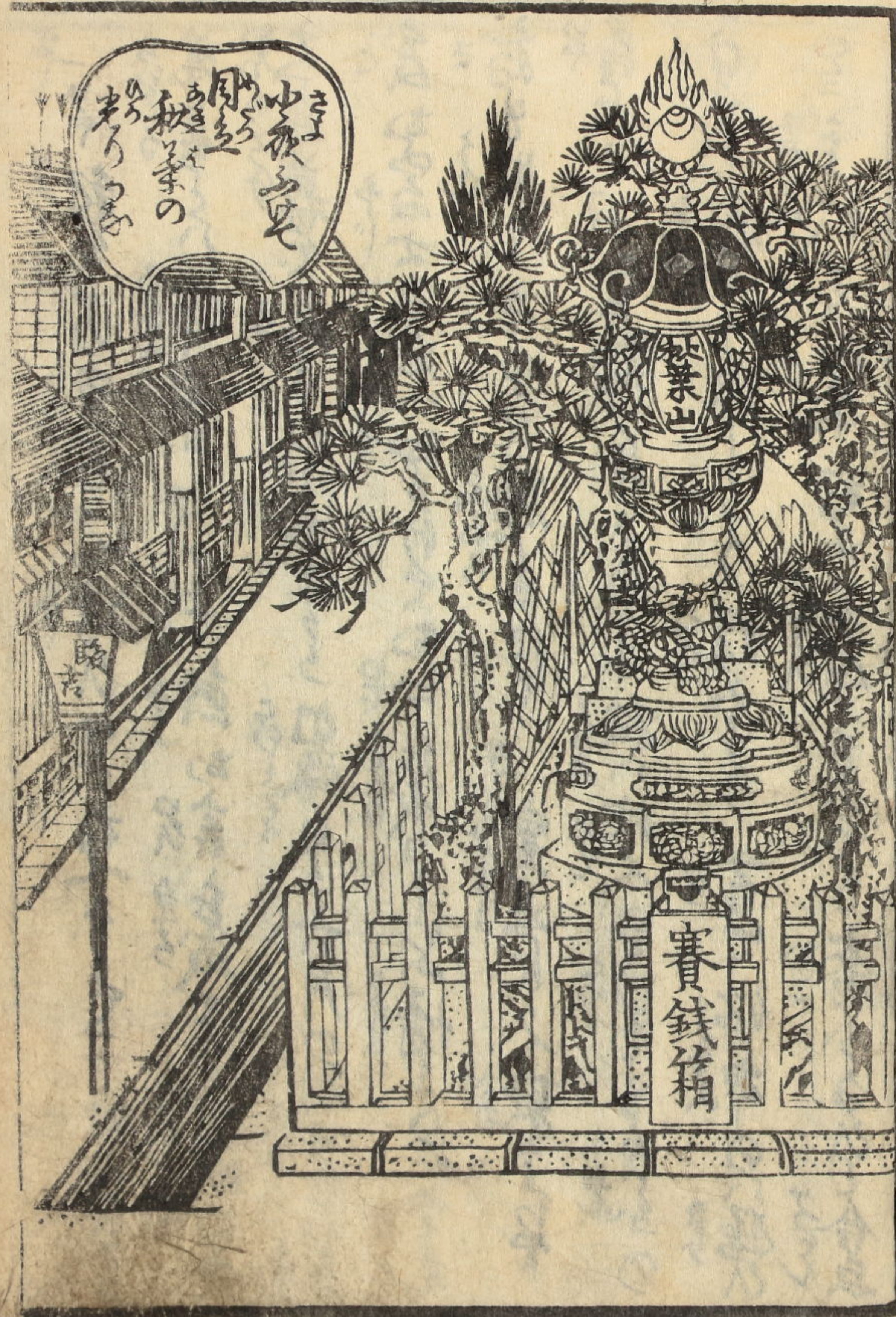
代におもたぬ 衣ハ早寔美そは奉ふの久く人遠ひ  
又後で解る後にも早寔美そは奉ふの久く人遠ひ  
あまぞ甘露梅も妙を併て居るヨ 衣ハ早寔美そは奉ふの久く人遠ひ  
又十一年う梅を巻るも早寔美そは奉ふの久く人遠ひ  
あて多私の年久幾まも思ひに 衣ハ早寔美そは奉ふの久く人遠ひ  
と思ひて居る衣 衣ハ早寔美そは奉ふの久く人遠ひ  
の久く思ひて居る衣 衣ハ早寔美そは奉ふの久く人遠ひ  
唐人の俄けは非茶のあまさんと 衣ハ早寔美そは奉ふの久く人遠ひ

でこの人業は... 年ほど... 元天... 貴... 居る  
ト言ひ梅の... 多げつけ... 梅... 存助の...  
折居る... 藝者の... 梅... 藝者...  
肝... 大... 聲... 痛... 料...  
... 速... 早... 夏... 免...  
... 大... 内... 意... 廿二  
... 老... 引... 十二  
... 入... 十

近所の元... 何... 安... 心...  
... 全... 居... 居...  
... 大... 言... 曲... 年...  
... 痛... 折...  
... 一... 個... 藝... 者... 住... 見... 側... 居...  
... 侍... 者... の... 被... 引... へ... 色... さん... 後... 居...  
... 言... 聞... ち... づ... 上... 一... 住... 居...  
... 一... 早... 着... の... 行...

まを宿る 一 五 宮通のては奔る下 穂をま  
めくは 廣遠の 輝く 一 早 狂人どえト 山谷の  
文全さんサ 一 早 狂人どえト 一 早 狂人どえト  
こゝろ 好情を 狂人どえト 一 早 狂人どえト  
一 左根久 山谷で 男の 知る 吉野の家へ 使を  
らふヤ 一 三 狂人どえト 一 早 狂人どえト  
一 早 狂人どえト 一 早 狂人どえト 一 早 狂人どえト  
一 早 狂人どえト 一 早 狂人どえト 一 早 狂人どえト  
一 早 狂人どえト 一 早 狂人どえト 一 早 狂人どえト

まを宿る 一 五 宮通のては奔る下 穂をま  
めくは 廣遠の 輝く 一 早 狂人どえト 山谷の  
文全さんサ 一 早 狂人どえト 一 早 狂人どえト  
こゝろ 好情を 狂人どえト 一 早 狂人どえト  
一 左根久 山谷で 男の 知る 吉野の家へ 使を  
らふヤ 一 三 狂人どえト 一 早 狂人どえト  
一 早 狂人どえト 一 早 狂人どえト 一 早 狂人どえト  
一 早 狂人どえト 一 早 狂人どえト 一 早 狂人どえト  
一 早 狂人どえト 一 早 狂人どえト 一 早 狂人どえト











あまのこ 只 梅あふくく 此の海に 舟入り  
はせ中へ 言ふ及 梅あふくく 此の海に 舟入り  
おのこ 只 梅あふくく 此の海に 舟入り  
抱負女あふくく 此の海に 舟入り  
とらて 見板の 型女あふくく 此の海に 舟入り  
のり子 只 梅あふくく 此の海に 舟入り  
別々 只 梅あふくく 此の海に 舟入り  
のり子 只 梅あふくく 此の海に 舟入り  
まのこ 只 梅あふくく 此の海に 舟入り

者があふくく 只 梅あふくく 此の海に 舟入り  
か隔のり 只 梅あふくく 此の海に 舟入り  
むらりの可 只 梅あふくく 此の海に 舟入り  
女あふくく 只 梅あふくく 此の海に 舟入り  
お使あふくく 只 梅あふくく 此の海に 舟入り  
面を 只 梅あふくく 此の海に 舟入り  
ぢやあふくく 只 梅あふくく 此の海に 舟入り  
値あふくく 只 梅あふくく 此の海に 舟入り



入字 眞らふま玉 〆てね然しへる倭原へん極め  
入字 眞らふま玉 〆てね然しへる倭原へん極め  
入字 眞らふま玉 〆てね然しへる倭原へん極め  
入字 眞らふま玉 〆てね然しへる倭原へん極め

名月年の日系町二丁目九番助福行の探見  
小なるの商人植木屋など種々の見舞を判り  
因日向の探見助福共の大明神と申するは昔保元

本律より入天保元年まで元正百八十餘年の由社

名月の意を以て右大お敷おのの地は昔保元  
の城主の葉友自衛の一族の末の末の末の末の末の末の末  
信達せしめ入に九番助福共と申す頂の信の極切し  
言傳ふ然る者昔度々より武彦野の地は昔保元  
原の田家の者の利益を以て之の地は昔保元  
頃より今よりも極名を以て申す

まゝに申されしに  
蓋 聖蹟著しく感應神徳光りてくぞんがごとく  
明會二年元花原今の地より移りし頃神社に  
世々としてけし神の徳を慕ひ富内安全電致の  
徳を預んと別ち崇り免當地へ遷座ありしを  
廓中の徳守の神と崇り信せしものもま  
毎年七月廿一日當社の祭禮有りとす  
始て徳を預りしを崇りしより八月に  
仲の徳ありし神の思ひ付て踊りね言たりし

此の廓の地は十倍の賑富ありしに  
なるを思ひて西向き徳向の徳ありしに  
此の廓の徳守の神と崇り信せしものもま  
基をまつしに只家の徳ありし廓の徳の全感あり  
のり神徳も漸く不遜に八町の町に  
宮を勧誘し九町助の徳ありし廓の徳の全感あり  
里の八町に信をまつしに八町二丁目の徳ありし

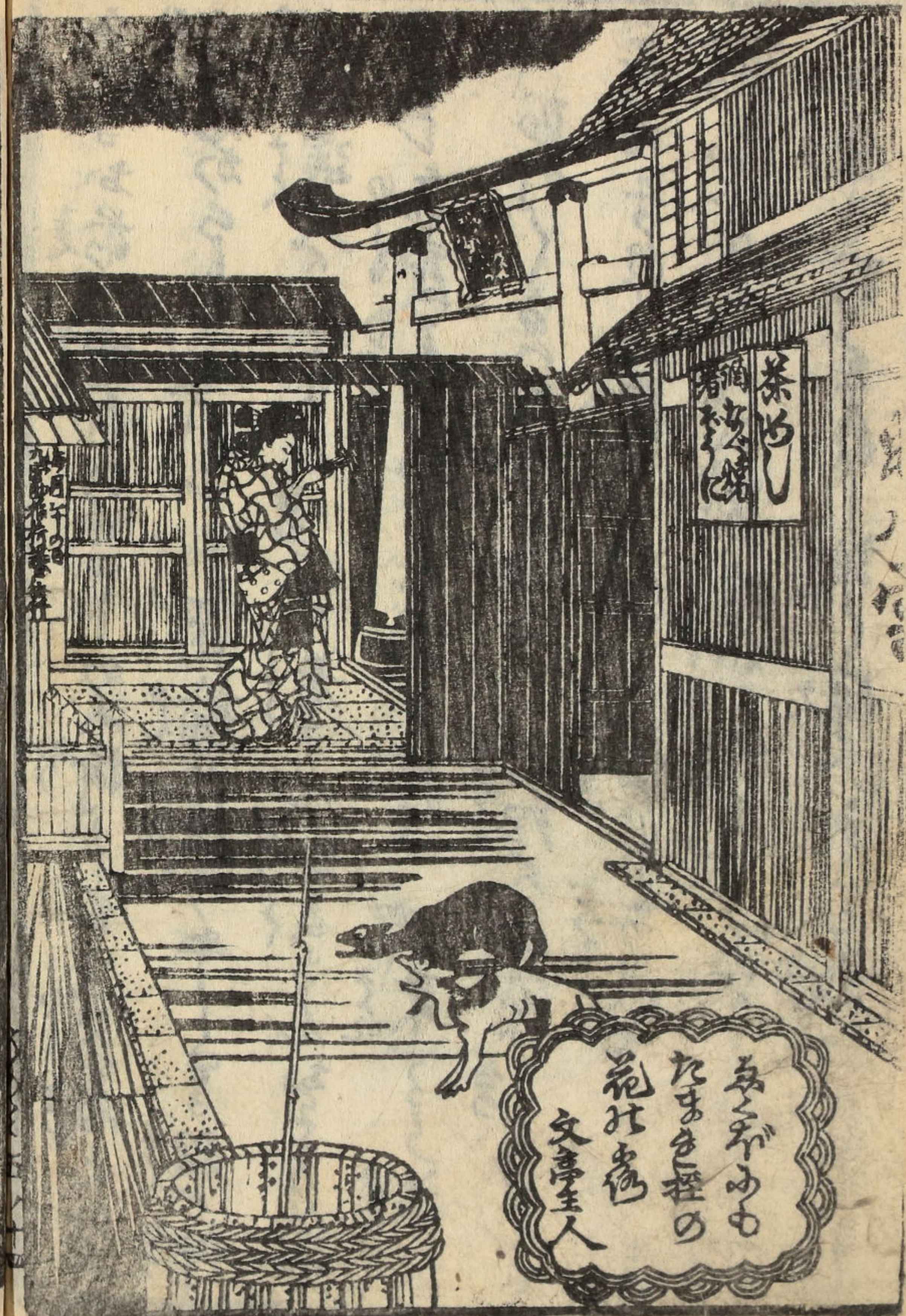
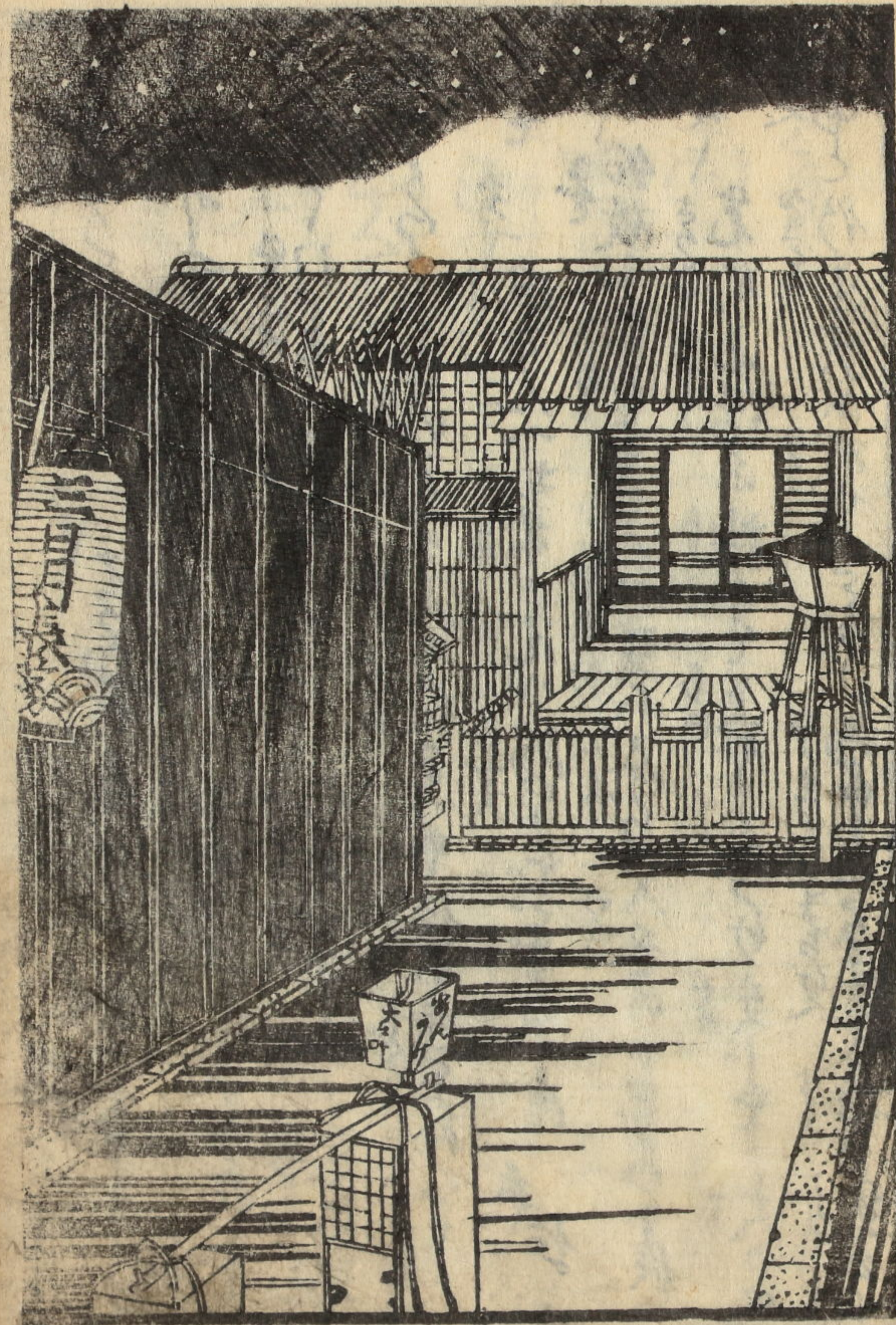
思ひて事久しき事 廓宝初巻持守とあるもの  
枕小終んとせしと當時の廓に好古の老人等  
集ひて神徳を古代のごとく齋戒し靈験を行はせ  
子の縁業あままりと再母ありとるの希助あり  
月く終ふ極日の侍りあまの最も  
右の巻が度のおつと當時の廓に准りあるせし  
物居るに同廓の茶亭一文舎がたよりを信じて著  
好古の諸君あまの流行したる事ありぬ

第十回

富士の雪根と新雪のほど見ると極ざし舟の江戸自舟  
舟のさうりあや今人猶おれ移り夏の家をさかす中  
とらうけて貴姓の群集張らひの各うとある北の里  
近き山丘の流るの宮舎の側の細路次を定むる長  
文稱きて日月の毎日日月の朔日の日のまほほ  
冬天にまあ雪の雲の美人も高く大遊園より引續  
つた通りの往来ハ行合押合定むと山野の入る城

まるゝ又ち心細いをさうりさで夫の座のま甲の髪をえ  
 える風俗の腹二人の髪はま髪細くの鏡の無にける  
 と掘り同じく又も細くの鏡のまのまにまを思入つけも  
 歩後歩歩歩の廊より甲一室をまをるの居るその居るに  
 規世音人廻り〜と居るで座の門より四辻の角を  
 北へさして遠くにまをる小の扇をて物の石をのまをる  
 先みまゝの傍輩の娘女をゆけ〜と申すお夏さん  
 お侍のねん言は速いことよ なるらぬ私の中におの  
 り

まのよおあが遅いのよと折しも三果夜とりの  
 人未からとて 後一毛とんご論を始りやしる松が件  
 人小遠入りのやせう 多しや者さんお夏さんお夏さん  
 後一毛毎度美舞をとお人まのま 如しは〜〜彼人が  
 後一毛のくまうて居るまもを理くるひま 多しかんで  
 どの方もはのの傍から〜ひと扇にたお後をまる 下キニ  
 家を掃除の入 多し一毛の信をまをるでどおのまの及は小今日  
 ハ物事おあらまぬ 早く帰らるゝおと恩板がやうき





くみりしひもせんヨ ちやみり身のよごはげんかたに  
あはせしとちよふ歳ヨ者ハカク ちやみり一ヤ一またち  
如ク早引をうて葉ハミク ちやみり一ハ早買一ト宛て  
顔のうらぐ一さ。らさるる人の花もや後の徳ハくさく  
死も ちやみり 者きんへお果せんハ解らとてごまのまじ 毎  
ちやみり 何故とちやみりせん三葉ハ今日入丹のでごまのまじハ  
ちやみり 先別由信不持せよ上り一つけまじや大よ  
ちやみり とは遠くハ成中一ちやみり 物果をう遠く極の實  
ちやみり

ちやみりせん

作者向違着よふ人の実名吉野 伊三郎とて鳥也  
四丁目本戸海の三葉線師より 離名を不ニ九と云  
洒落人ハ廊中男女の着者達をとりも大腕  
ちやみり 三葉線と桃ハ頼ハ近世稀なる三味線細の  
よごは

よごは

ちやみり ちやみり ちやみり  
ちやみり ちやみり ちやみり  
ちやみり ちやみり ちやみり  
ちやみり ちやみり ちやみり



ともん ちんぎょう  
おろかふ 湘合一とりのん ざう 好書で 中野のいふ  
あつ 利のす 如 三葉娘も 狂言 ともん 一甲 草も  
切者 治も ともん 一甲 狂言 ともん 如 イヤ 狂言  
仲多町で 婦多川へ 狂言 茶ハセ ともん 狂言 狂言  
感む まる 風合 ともん 唐琴 狂言 宅合 狂言 狂言  
狂言 狂言 狂言 狂言 狂言 狂言 狂言 狂言 狂言  
狂言 狂言 狂言 狂言 狂言 狂言 狂言 狂言 狂言  
あはら ともん ともん ともん ともん ともん ともん ともん ともん ともん

如 狂言 狂言 狂言 狂言 狂言 狂言 狂言 狂言 狂言  
ト ともん ともん ともん ともん ともん ともん ともん ともん ともん  
石原を ともん ともん ともん ともん ともん ともん ともん ともん ともん  
け ともん ともん ともん ともん ともん ともん ともん ともん ともん  
狂言 狂言 狂言 狂言 狂言 狂言 狂言 狂言 狂言  
あはら ともん ともん ともん ともん ともん ともん ともん ともん ともん

春色梅美婦 祢卷之五

一文舎 鳥水 柳水校合

